

【人物から学ぶ歴史】

杉浦重剛 続編

<宮中某重大事件>

昭和八年、皇太子の御妃（おきさき）として久邇宮良子（ながこ）女王殿下が正式に決定し発表された。

これに対し元老の山県有朋が、良子女王の母君の系統、島津家の中に一部色弱の人が居ると、一旦決定したご婚約を破棄すべく、久邇宮家辞退を迫るという重大事件があった。島津家の色弱の件は専門家による否定判断で処理済みであったが、山県はあえて反対した。山県には当時何人も逆らえない権力を持っていたが、杉浦は山県に対し許すべからざる暴挙として戦いを決定した。当然、杉浦に協力する有力者は居なかったが、孤軍奮闘する杉浦の義に感動した頭山満が助け、約七十日の不眠不休の運動を展開した結果、山県も折れて、政府は変更なしの発表を行った。杉浦の毅然たる姿勢と渾身の努力と頭山満の助力によって、この有るまじき不祥事は回避し得たのである。事件落着後、御進講を再開、大正十二年、合わせて十年にわたる大任を終えたのである。

<杉浦の皇太子に対する思い>

杉浦はある人に「帝王学とはどんな学問ですか？」と問われた時、言下に「至誠の学問じゃ」と答えた。若き皇太子殿下も、杉浦の御進講に誠心誠意応えられた。

裕仁親王は大正十年十一月、大正天皇御病気の為二十才で摂政につかれる以前、高輪の東宮学問所で学ばれている頃、倫理担当の杉浦重剛に「君徳」とは？と問われた。皇太子殿下は聖徳太子が碑文に残された『日月私照なし』…（お日さまにも、お月さまにも決して自分さえ良ければ…という心はない。どんな人にも同じようにあたたかな光、あかるい光を与えてくれる。天皇はいつもそのようでなければならぬ。）と即答された。杉浦はいたく感動したそうである。

皇太子殿下について杉浦は次のように語っている。「莊嚴にして雄大なる君徳をば、御参考となるべき古今東西の格言、及び実例につき御進講申し上げるに、ただに善く、その要領を御会得あそばさるるに止（とど）まらず御自発の御見識

高邁（こうまい）なる、ひたすら欽仰（きんぎょう＝敬い仰ぐこと）の外（ほか）なし。身常侍（みじょうじ＝常におそばにつかえること）の職にあらざるを以って、御平素を詳知する能わずといえども、観察の及ぶ限りにおいては一々御実行あそばるるを見るなり。不肖三十八年間高等普通教育に従事し、万を以って数うべき天下の英才に接触したけれども、未だ曾（かつ）て見ざるところの御性格なり」また「杉浦など御指導申し上げた、などとは以ての外で、終始御指導を仰いでいたような気がしてね。唯もう、戦々競々と、寝ても覚めても…だが恐れながら満点以上であらせられるので、杉浦も始めて、どうやら及第したような安心を感じましたよ」…と。

皇太子殿下は杉浦の心を満足せしめた最も優れたる「**教え子**」であった。皇太子殿下は杉浦の御進講した「**至誠の学問**」を真直ぐに深く受けとめられ、身を以って実践された。それは昭和天皇八十余年の御生涯が何より雄弁に物語っている。

<御成婚と杉浦の死>

大正十三年一月二十六日、いよいよ両殿下御成婚の盛典が挙行された。誰よりもそれを待ち望んだのは杉浦ではなかったろうか。全てを捧げてお仕えした両殿下の前に立ちはだかった障害を、命をかけて払いのけた杉浦の悦びと感慨は筆にも口にも名状し難きものであった。そうして、杉浦はこの盛典を見届けるようにこの年の四月に永眠したのである。七十才であった。



ご成婚当時の御写真

杉浦の残した最後の言葉は「ただ国家の前途を憂うのみじゃ」である。杉浦の胸中に在るものは、常に「国体」であったのである。

<杉浦重剛の人物像>

「日清戦争の頃、文部大臣に誰が良かろうと相談を受けた時、自分は『文部大臣になる人は名を聞いただけでも、頭の下がるような人物でなければいかん。これに当てはまるのは杉浦のような人じゃ』と云うておいた。」

「今の学者というものは、流行に媚びへつらい、それを以って衣食しているに過ぎない。この事は日本の将来にとって何よりの憂いである。然るに杉浦は独りこれらと選を異にする知行合一（ちこうごういつ）、智勇兼備の学者で、口に聖賢の道を説き、而（思考）してこれを実行する人で、真に天品（最も高い品性の人物）であった。彼は日夜限りなく国事を憂えた。」

「本当の学者は世の中の太陽である。杉浦が恰度それであった。真に天下の至宝じゃった。杉浦は鵜の毛ほどの欠点であった。君子という文字は書物にあるが、生ける君子は滅多にない。杉浦はその稀有（けう）の一人であった。」

「人らしき人の少ない今の世に、杉浦の如きは人間離れした真の人格者であった。否、人格というよりは神、格、神に祀られるべき資格を備えて居った。」

以上の言葉は、明治・大正・昭和の三代を通じ真の国士として仰がれた頭山満の評である。



頭山満

杉浦の命をかけた御進講と杉浦の教えを、身をもって実践された昭和天皇との師弟関係は、昭和天皇八十余年の御生涯が「最高の師弟関係」であった事を何よりも明白に物語っている。杉浦の教えがあったからこそ昭和天皇は国民を愛し、大切な宝とし、伝統ある日本という国体を、命をかけ守られるとともに、敗戦後の最大の危機を守られたのであろう。恐れながら教育の大切さを、この歴史的事実から、私は実感させて戴いたのである。

吾々は昭和天皇の偉大なる御人格と、国民の為に尽くされたご実績を知っている。その昭和天皇を御偲びする時、この純忠至誠の人、杉浦重剛の報恩の赤心を思い学ぶことも必要であろう。

杉浦は単なる学者でも教育者でもなかった。真の愛国者であり、誠の智者・仁者・勇者であったのである。杉浦は頭山満が言う通り、真に「天下の至宝」と称されるに恥じない希有の人物であろう。

我々は杉浦重剛を通して「至誠」の尊さを心にとどめたい。

平成 28 年 5 月 22 日

志雲会塾長 有馬正能